



第31号

令和3（2021）年11月26日発行
会 員 募 集 中
年会費 3,000 円
10月以降入会 1,500 円

歴研日曜サロンから

「ベールを脱ぐ謎の城 鬼ノ城」 — 鬼ノ城に温羅はいなかった —

講師：総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井 典子氏

令和2年（2020）12月27日、日曜サロンが開催され、平井典子氏による鬼ノ城についての講演に34人が参加した。最新の発掘の成果を踏まえ、これまでベールに覆われていた鬼ノ城の真実の姿を明らかにしていただき、その後熱心な質疑応答が交わされた。

歴史好きとしては、鬼ノ城と温羅伝説との関係に興味をひかれるところであるが、講演では温羅伝説の話はほとんどなかった。質疑応答の中で、「温羅伝説はあくまでも伝説であって、考古学による科学的実証と混同してはならない。伝説の存在自体を否定するものではないが、温羅伝説は観光施策上の引用戦略であって、いくらロマンがあっても歴史学上の史実とは異なる。築かれた鬼ノ城に温羅という鬼が

歴・研・展・望

後期高齢者と呼ばれる歳に近づいてきた。偉人と言われる人たちは晩年をどのように過ごされたのか、大いに興味がある。中でも、気になるのが犬養木堂先生と津田永忠である。

私は、庭瀬駅にある展示の扇子にある木堂先生の詩「本来無一物、而無塵可拂」（生まれながら何ももってない。よって払うことができる塵もない。）に共感、共鳴している。小さな分野で専門家になったという積りであるが、広い世の中から見ればわずかなことで、知らないことの方がはるかに多い。木堂先生はそのことを十分承知していて、血気に逸る将校たちに「話せばわかる」と問いかけ、論そうとしたのではないか。また、現に遺言に、葬儀は質素に、墓には「備中庭瀬の人 犬養毅」とだけ書けと遺している。

その木堂先生も晩年、一度、政界を引退した。が、地元の後援者がその補欠選挙で再度、担ぎ出し当

選した。そして、その後、総理大臣、5.15事件となった。

一方の津田永忠は、岡山藩の池田光政、綱政、父子に仕え、後樂園など後世に残る仕事を数多く遺している。岡山歴史研究会の立ち上げ集会の際、顧問の柴田一先生から「大学の学問は四年で終わるが、耳学問をする気になれば一生できるぞ。津田永忠は中学も高校も出てないぞ。」と印象に残る話を伺った。あれだけのことを遺すには相当の耳学問をし、又努力も重ねたはずである。しかも永忠は67歳にして末子をもうけている。

私自身、社会人になって以来、関わってきた水処理の仕事在未だに続けている。今年に入り、湖沼の浄化法について3件目の特許の申請をしたところである。それにしてもやり残したことが多く、迷いの日々が続いている。

（会長代行 楠 敏明）